

小児用新型コロナワクチン接種について当院の方針

思い出してください。2年前から始まったコロナ禍の生活。当初はワクチンも治療薬もなく、マスクや人との距離を保つ生活しか対策はありませんでした。ただ、この一年でワクチンや治療薬が開発され、12歳以上の生活への制限は今後緩和されつつあります。

高齢者を中心にワクチン接種を優先して行ってきましたが、ようやく5歳～11歳のワクチン接種も開始されました。この間に、コロナ感染は大人の感染症から、子どもたちへの感染症にシフトしてきています。これからもコロナの流行はやってくるのが予想されています。

私たちの考えは『後で後悔しないためにもできることは、できる時にやっておく』です。感染してしまっても、思わぬ重症になったり大変な思いをしたときに、「あの時にワクチンしておけばよかった」と思わないよう行動してください。

一方で、ワクチンをした後に後悔しないためにも、割合は低いものの一定の子どもたちには発熱（5%）や倦怠感（20～30%）、接種部位の痛み（70%）があることは、お子さんにきちんと事前に説明して知っておいてもらうことも大切です。

下記は私の所属するVPDの会の「5歳～11歳のワクチン接種に対する考え方」の文章です。ご参考にしてみてください。

いわずみファミリークリニック 飯泉 哲哉

5歳以上の子どもの新型コロナワクチンの接種を推奨します

子どもの新型コロナウィルス感染症の多くは軽症に分類されますが、発熱やのどの痛みなどの辛い症状が現れます。

まれですが重症化すると入院治療を要したり、数週間経ってから多系統炎症性症候群（MIS-C）という命にかかわる病気を発症したりします。

これらのことから、子どもたちを感染や重症化から守るためにワクチンを受けることをお勧めします。

子どものうちに新型コロナウィルスから日常を守るベースづくり

新型コロナワクチンを3週間隔で2回接種し1～2週間経つと体内に免疫がつくられ、新型コロナウィルス感染症に対する予防効果が高まります。ひとたび免疫を獲得しておけば、ワクチンの効果が低下しても追加接種によって迅速に効果を高めることができます。

子どものうちに免疫を獲得して新型コロナウィルスから日常を守るベースをつくるためにも、ワクチン接種をお勧めします。

5～11歳に対してもワクチンの有効性は高く、接種後の副反応のほとんどは軽症

5～11歳が接種する新型コロナワクチン（ファイザー製）は、12歳以上のワクチンの有効成分を減量して有効性と安全性を確認した子ども用ワクチンです。

副反応の発症頻度は12～15歳、16～25歳よりも低く、心筋炎については12～15歳、16～17歳よりも起こりにくく、発症した全員が回復したとの報告があります。

新型コロナワクチンの接種前に知っておきたいこと

新型コロナウィルス感染症は子どもたちの生活に様々な変化や制約を課すだけでなく、感染の不安など精神面にも影響を及ぼしています。これらの点において、従来のVPD（ワクチンで防げる病気）とは異なります。

またワクチン接種後の副反応の多くは軽症ですが、辛い痛みや発熱などが現れる場合があります。接種後におこる症状を事前に知らされることなく副反応を子どもたちが経験すると、予防接種だけでなく、保護者や医療者に対する不信感を招くおそれがあります。そうした事態を避けるには、お子さんに接種の意義、メリットとデメリットを説明して、保護者が接種を勧める理由をそれぞれの年齢なりにお子さんが理解することが大切です。

こちらも参考になさってください

Cov-
ナビ
Navi



コワくん

